

アリストテレスにおける変化の説明と「ウーシアー」の理解

——『カテゴリー論』第5章4a10-b18と『自然学』第5巻第1章——

岩 田 圭 一

1 問題の所在

アリストテレスの形而上学的思考における中心的な概念である「ウーシアー (*ousia*)」については、その語がもつ本来の意味合いやその用法の多様さから、「実体 (substance)」という伝統的な訳語を採用しないという選択肢がある⁽¹⁾。しかし比較的多くの研究者が「実体」という伝統的な訳語を、不適切な面があると理解した上で使用し続けている。最初に、「ウーシアー」という語の用法の多様さについて簡単に説明しておく。この語は、カテゴリーの一つ——実体カテゴリー——を表すために、あるいは当該のカテゴリーに属するものを示すために、術語的に用いられることが多いが、術語的にではなく「本質」という意味で用いられることもある⁽²⁾。カテゴリーの一つとしての「実体」には、「何であるか」という問いの答えとしての「本質」という意味合いがあるが⁽³⁾、われわれはそこに、術語的ではない「本質」との連続性を読み取ることができる。しかしながらカテゴリーの学説では、実体が付帯的な属性の担い手としての基体 (*hupokeimenon*) であることが強調される。『カテゴリー論』では、付帯的な属性および実体カテゴリーの種や類にとっての基体——究極的な基体としての個別的な実体——に対して「第一の実体」という呼び名が与えられるが、個別的な実体としての「ウーシアー」は「本質」とは異なるものである。ただしアリストテレスにおいては、「何であるか」の答えとなる本質の名で捉えられる限りの個別的なものが個別的な実体であり、個別的な実体としての「ウーシアー」から「本質」の意味合いを締め出すことはできない⁽⁴⁾。このことは、『カテゴリー論』において第一の実体の例として「ある特定の人間」や「ある特定の馬」などが挙げられることから理解できる。こうした意味合いに注意を向ける場合も、カテゴリーの一つとしての「実体」という理解が定着していることからすれば、それらの例を「実体」という伝統的な訳語で捉えることにそこまで大きな問題はないように思われる。

付帯的な属性および実体カテゴリーの種や類にとっての究極的な基体は、論理的な観点において理解される個物である。アリストテレスは実体カテゴリーのものを付帯的な属性から区別して捉え、また、実体カテゴリーのうちでは類を種に分割し、種を個に分割することによって、個物としての実体を捉える⁽⁵⁾。そのような個物 (個別的な実体) は類種構造の観点から見た不可

分なもの (*atoma*) である (cf. *Cat.* 2, 1b6)。しかし個別的な実体をこのような仕方に取り出すことには問題があるように思われる。すなわち、付帯的な属性および種や類から区別された個別的な実体はいわゆる裸の基体であるように見えるという問題である。しかし、アリストテレスが個別的な実体として具体的な個物——さまざまな属性をそのうちにもっている——ではなく裸の基体のようなものを考えていたというのは、われわれの感覚に示される経験的な対象を軽視せずに研究したアリストテレスにはふさわしくないように思われる。本稿では、アリストテレスが個別的な実体として具体的なものを考えていたことを示すために、「実体」の特徴が説明される際に実体それ自体が変化することへの言及が行われる『カテゴリー論』第5章の一節 (*Cat.* 5, 4a10ff.) に注意を向けることにする。アリストテレスはその一節で、変化の基体——『自然学』第1巻第7章に示されるような——ではなく、変化の主体——実体それ自体が変化するという意味での——を問題にしている。その説明において、具体的なものとしての「実体」という理解が得られることになる。この説明は、『自然学』第1巻第7章などに見られるような、生成変化の基体を分析的に捉える生成論ではなく、『自然学』第5巻第1章における変化 (*metabolē*) ないし運動変化 (*kinēsis*) の説明と関連があるように思われる。この変化の説明の中にも変化の主体という考えを読み取ることができる。また、その章には端的な生成と消滅が説明される箇所があるが、そこでも具体的なものとしての「実体」という理解が確認されることになる。以下、それぞれのテキストについて順に見ていくことにする。

2 実体それ自体の変化

アリストテレスは『カテゴリー論』第5－9章において、第4章で区別した十のカテゴリーのうちの主だったものを取り上げて考察している。第4章においてカテゴリーの区別が行われる際には、「実体」、「性質 (*poion*)」、「量 (*poson*)」、「関係 (*pros ti*)」といった語はそれぞれのカテゴリーを表示するために用いられている。「実体」という語に関しては、何かあるものについてそれは何であるかと問うた際の答えにあたるものを捉えることで、その範疇を理解することができる。「人間」や「馬」といった例が挙げられているのだが、それらの語が個別的な人間や馬を指すのか、普遍的な人間や馬を指すのかという存在論的な問題は、その文脈では考える必要がないと言える。これに対して第5章以降では、それらそれぞれのカテゴリーに入るものが問題にされており、それらの章の内容には存在論的な問題意識を読み取ることが可能である。

『カテゴリー論』第5章では、付帯的な属性と実体カテゴリーの種や類にとっての基体である個別的なもの、すなわち第一の実体が、その他のものの存在にとって必要な、いわば原因のような存在であることが明らかにされている (*Cat.* 5, 2a34-b6)。そして「第二の実体」と呼ばれる種や類についても説明が行われ、第一の実体との関係も明らかにされる (2b7-3a6)。第5章における考察は基本的に、第2章で提示された内属性と述語づけの区別に基づいており、述語づけ

の理論——内属性も含むものとして⁽⁶⁾——の観点から種差や定義についての説明（3a21-b9）も行われる。そしてアリストテレスは第5章の後半において、その章全体の三分の一程度の長さで、「実体」の特徴について考察している。すなわち、実体には反対のものがないということ（3b24-32）、実体は「より多く」と「より少なく」を受け入れないということ（3b33-4a9）、そして同一の実体が反対のものを受け入れることができるということ（4a10-b18）について考察を行っている。そこでは、実体カテゴリーに入るものがどのような特徴をもっているかが具体例によって示されている。一つ目の特徴の説明では、ある特定の人間にも人間にも動物にも反対のものはないと言われ、二つ目の特徴では、二人の人間を比べてその一方が他方よりもより多くあるいはより少なく人間であるということはないと言われている。三つ目の特徴について、以下で詳しく見ることにする。

アリストテレスは「実体」の特徴の三つ目として、「それが数的に同じで一つでありながら反対のものを受け入れることができること（*to tauton kai hen arithmōi on tōn enantiōn einai dektikon*）」（4a10-11）を挙げている。この特徴は、「実体に最も固有であるように思われる」（a10）と言われていることから、「実体」と呼ばれるものがどのようなものであるかを考える上で重要な特徴であると考えられる。実体以外のカテゴリー（非実体カテゴリー）に属するものについては、「数的に一つでありながら反対のものを受け入れることができるものを提示することはできないだろう」（a11-13）と述べられ、数的に同一である色が白くも黒くもあることはないといった例が挙げられている（a14-17）。数的に同一である色とは、『カテゴリー論』第2章における内属性と述語づけによる〈ある〉もの（*onta*）の分類から考えて、ある特定の白といった、いわゆる個別的な属性のことであり得ると考えられる。白くも黒くもあることはないと言われる個別的な色が何色であるかは明示されていないが、仮にその個別的な色が白であるとした場合、それは白という種に属する限りの個別的な色であるので、それが黒やその他の色を受け入れることはないだろう⁽⁷⁾。あるいは、反対のものとして白と黒が挙げられており、これらとは別の色がここで数的に同一である色として挙げられていると考えることもできるだろう。例えば個別的な灰色は灰色という種に属する限りのものであるもので、それがあるときは白く、他のときは黒いということはない。このような非実体カテゴリーのものとは異なり、「ある特定の人間は、一つで同じでありながら、あるときには白くなり、他のときには黒くなり、また熱くなったり冷たくなったり、劣悪になったり優れたものになったりする」（a18-21）。個別的な人間が状況や環境によって肌の色が変わったり体温が変わったりすることがあるというのは、実体と付帯的な属性との関係からして明らかなことである。

しかし、述語づけの理論の観点に立つとき、二つの反対の属性を受け入れうる個別的な人間について疑問が生じる。例えばある特定の人間が冷たい状態から熱い状態になる場合、その個別的な人間はまず冷たい人間として存在しているはずである。「ある特定の人間」という言葉が用い

られていることからわかるように、ここでアリストテレスは第一の実体を念頭に置いていると考えられる。第一の実体は他のもの（付帯的な属性、実体カテゴリーの種や類）にとっての原因となる第一の存在であり、それら他のものとは区別されたものである。述語づけの理論の観点からすれば、冷たいという状態も熱いという状態も、さらに言えば他のすべての付帯的な属性も取り去られたものとしての第一の実体が、反対のものを受け入れることができるものであることとなるだろう。しかしこれはいわゆる裸の基体であるように思われ、問題である。アリストテレスは変化を説明する際に、そのような基体を念頭に置いているのだろうか。

この疑問を解消するには、変化が説明される文脈における「実体」という語を、述語づけの理論の観点で用いられているのとは異なる仕方では理解することが必要である。アリストテレスは、非実体カテゴリーのものが同一のものでありながら反対のものを受け入れることがないことを示した後、言明 (*logos*) と判断 (*doxa*) という、実在とは異なるものが、実体と同じような仕方では反対のものを受け入れることができる可能性について考えている (4a22ff.)。この可能性は他の人が提示したと考えられるもので、アリストテレスはその可能性を否定することになるが、ここで注意したいのは、変化の主体が、具体的、現実的なものであることが示唆されていることである。その箇所の説明によれば、言明と判断は同一のものでありながら反対のもの（真と偽）を受け入れることができる。例えば「ある人が座っている」という言明は、その人が実際に座っていれば真であるが、その人が立ち上がると偽になる。その人が再び座れば、その同じ言明は再び真になる。真と偽という反対のものの受け入れというこの変化において、当該の言明は同一のものとしてとどまっている。これは、実体が同一のものでありながら反対のものを受け入れることができるということと同じことであるように見える。しかし実体の場合と言明や判断の場合とでは、受け入れることの意味に違いがあることが示される。アリストテレスは次のように説明している。

というのも諸々の実体の場合、それらはそれら自体が変化することによって反対のものを受け入れることができるからである (*ta men gar epi tôn ousiôn auta metaballonta dektika tôn enantiôn estin*)。実際、熱いものから冷たいものになったものは変化した (*metebalen*) (すなわち性質変化した (*êlloiôtai*)) のであり、白いものから黒いものになったものも、劣悪なものから優れたものになったものもそうであり、そして他のものの場合も同様に、それぞれのもものはそれ自体が変化を受け入れることによって (*hekaston auto metabolên dechomenon*) 反対のものを受け入れることができるのである。しかし言明と判断は、それら自体があらゆる点であらゆる仕方において運動変化しないものであり続けるのであって (*auta men akinêta pantêi pantôs diamenei*)、事態が運動変化することによって (*tou de pragmatos kinoumenou*) それら〔言明と判断〕について反対のものが生じるのである。実際、

「ある人が座っている」という言明は同じものであり続けるのであって、その事態が運動変化することによって、その言明はあるときには真になり、またあるときには偽になるのである。そして判断の場合も同様である。したがって、その仕方〔反対のものを受け入れる仕方〕の点で実体に固有であるのは、それ自体の変化によって (*kata tén hautês metabolên*) 反対のものを受け入れることができるということであるだろう。(Cat. 5, 4a29–b4) ([] は筆者による挿入)

この箇所では、実体が属性的に変化することについて、実体それ自体が変化すると明確に語られている。白いものから黒いものになるなどするのは個別的な実体であるので、アリストテレスはここで、第一の実体の属性が変わる場合に当の第一の実体それ自体が変化すると述べていることになる。先ほど説明したように、第一の実体は他のものの存在にとってのいわば原因であり、他のものとは区別されたものである。この考えは、述語づけの究極的な基体という理解に基づいているが、この理解は、実体それ自体が変化するという上の説明とうまく合わないと思われる。この理解に基づくなら、実体それ自体は変化せず、これに付帯していた白が黒に置き換わることによって、当該の変化が説明されるはずである⁽⁸⁾。このような説明は実際に『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明に見られる (cf. *Ph. I 7, 190a9–11, 17–19*)。

この生成変化の説明を見ると、述語づけの理論における究極的な基体という理解が前提された仕方で生成変化が説明されていることがうかがえる。『自然学』第1巻第7章では、例えば教養のない人間が教養ある人間になるといった属性的な変化について、生成変化の原理として、教養とその欠如という形相的なものほかに、当該の生成変化において変化することなく存続する基体として個別的な人間が存在するということが説明される⁽⁹⁾。生成変化の説明における存続基体は、述語づけの基体とは区別されるが、述語づけの理論を前提にしていると考えられる。この例で、個別的な人間と教養とその欠如とは明確に区別された存在であり、それらは生成変化の原理として理解されている (cf. 190b29ff.)。述語づけの理論においても、述語づけられるものとその基体とは区別されている。しかしその区別は裸の基体という考えをもたらしかねないものであり問題であるということは、すでに指摘したとおりである。

『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明が、アリストテレスによる変化の説明のすべてであるかという点、そうではない。そこでこの説明の目的は、生成変化の原理の数を明らかにすることである。このような原理の探究においてアリストテレスは、述語づけの理論の場合と類似した分析的な仕方で実在を切り分けて説明していると考えられる。この分析的な仕方においては実在がそのままの姿で取り出されているのではないことに注意する必要がある。述語づけの理論においては第一の実体、第二の実体、付帯的な属性といった存在の区別が行われ、第一の実体の優位性が示されていた。『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明では、属性的な変化を

成立させる不可欠の要素として基体が存在することが示されている。分析的に取り出された基体としての個別的な実体をそのまま実在として——第二の実体や付帯的な属性とは異なる実在として——認めると、裸の基体という存在を考えることにつながるように思われる。しかし、そのような存在を立てることは、アリストテレスの意図したことではないと考えられる。アリストテレスは『自然学』第5巻第1章における変化ないし運動変化の説明において、端的な生成と消滅を属性的な変化と区別する際に、「ウーシアー」という語を、「〈あらぬ〉もの (*to mê on*)」ないし「あらぬ (*to mê einai*)」との対比で用いている (*Ph.* V 1, 225a15–16, 18)。その区別に至る運動変化の説明では、属性的に変化するもの (変化の主体) が存在することが示されているが、『自然学』第1巻第7章に見られる存続基体は示されていない。そこでは変化ないし運動変化の種類を区別することが目的であり、最終的に、端的な生成と消滅は運動変化から除外され、性質変化、量的変化、場所移動の三つが運動変化とみなされることになる (a34–b1)。生成変化の原理を明らかにするのは異なる目的で論述が展開されているのだが、この論述では、裸の基体とみなされかねないような存在への言及はなく、むしろわれわれにとってなじみのある具体的なものがまさに属性的に変化したり生成したり消滅したりすることが示されている。「〈あらぬ〉もの」との対比で用いられる「ウーシアー」という語も、具体的なものを念頭に置いて用いられているように思われる。次に、『自然学』第5巻第1章のテキストを取り上げ、アリストテレスにとって、個別的な実体は基本的に、具体的なものであるということを確認することにしたい。

3 具体的なものとしての実体

アリストテレスは『自然学』第5巻第1章のはじめで、変化ないし運動変化を三つの種類、すなわち、付帯的な運動変化、部分的な運動変化、自体的な運動変化に分け⁽¹⁰⁾、その章の前半でこれらの運動変化について説明し、後半では自体的な運動変化に注目し、カテゴリーの区別を前提した形で端的な生成および消滅といくつかの運動変化とを区別している。ここでは自体的な運動変化に関する論述を取り上げることにするが、付帯的な運動変化と部分的な運動変化についても簡単に見ておく。付帯的な運動変化とは、付帯的な属性が明示された形での属性的な変化のことである。「教養あるものが歩く」(*Ph.* V 1, 224a22) という例が挙げられているとおり、この属性的な変化の基体をなす人間が明示されていないために、歩くという状態への変化はの場合、付帯的な運動変化であるとされる。変化の基体として人間などが存在することは、「教養あるものであることが付帯しているところのものが歩く」という説明 (a23) から明らかであるが、この章では運動変化の原理を明らかにすることが目的であるのではなく、運動変化の種類を区別することが目的であるということもあって、存続基体としての「基体」への言及はこの章では行われない。それから、部分的な変化というのは、実際には何かの部分が変化しているにもかかわらず、その何かの全体が変化しているように語られる変化である (a23–26)。病気になっていた目

の状態がよくなる場合に、体がよくなったと語られる場合がその例である。

三つ目の自体的な運動変化は先の二つとは異なる運動変化であるとされ、「そのものが第一に〔直接的に〕運動変化することによって (*tôi auto kineisthai prôton*)〔運動変化する〕何かあるものが存在する」と説明されている (a26-28)。アリストテレスはこれを「自体的に運動変化しうるもの (*to kath' hautō kinêton*)」(a29)と呼んでいる。運動変化は「何かあるものから何かあるものへ (*ek tinos kai eis ti*)」の運動変化であるので、運動変化には「それから」の「それ」と「それへ」の「それ」とがあるとされる (a35-b1)。これらは先の『カテゴリー論』からの引用で「反対のもの」と呼ばれていたものに相当すると考えられる。また、そうした反対のものとは別に、「第一に〔直接的に〕運動変化するもの (*to prôton kinoumenon*)」がある (b1-2)。もちろん、直接的に運動変化させるものもあるが (a34)、これについてはここでは問題にしないことにする。直接的に運動変化するものは、『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明に見られる「基体」に相当するように思われるかもしれないが、生成変化の原理としての基体を語ることはここでは行われていない。述語づけの基体にも通じる生成変化の原理としての基体は示されず、直接的に運動変化するものというありふれた言い方で運動変化するものが捉えられていることは重要である。原理としての基体はそれと区別される反対のものとの区別が際立つが、そのありふれた言い方においては、その区別はそこまで強調されないように思われる。アリストテレスはここで、直接的に運動変化するものとして木材を例に挙げ、反対のものとして熱いものと冷たいものを挙げている (b2-3)。「木材が熱い」という述語づけ——内属性と呼んでもよいが——を念頭に置くと、基体としての木材と反対のものとの区別が際立つが、アリストテレスはここでそのような述語づけには言及していない。運動変化は形相 (反対のもの) においてあるのではなく、木材においてあると言っている程度である (b4-5)。この木材は、熱いといった属性をもつ具体的なものであると考えられる。具体的な存在としての木材が直接的に運動変化するものであるということは自然に理解されるだろう。

こうして、運動変化の主体が具体的なものであることが理解されるが、これは「実体」という語で捉えられてしかるべきものである。アリストテレス自身はここで変化の主体を「実体」とは言っていないが、反対のもののことを、「形相、あるいは場所やこれだけ〔の量〕」と表現している。木材の性質変化が例に挙げられていることを考えると、この箇所の形相は、非実体カテゴリーのもの、すなわち、属性的な形相であると理解することができる。熱い、冷たい、白い、黒いといった、性質カテゴリーに属するものが、そこでの「形相」によって考えられている典型的なものであるが、非実体カテゴリーには性質だけではなく、量や場所などもあるので、アリストテレスは、非実体カテゴリーのうちで変化を考えることができるものとして、「場所やこれだけ〔の量〕」を付け加えたのだと考えられる⁽¹¹⁾。後でアリストテレスは自体的な運動変化として性質変化、量的変化、場所移動を区別し、端的な生成と消滅は「運動変化」という名のもとには含めないと

いう結論に至っている。このように、アリストテレスがここでそうした属性的な変化のことを念頭に置いているのだとすれば、直接的に運動変化するものは、属性的な変化がそこにおいて生じるところの実体であることになるだろう。そして先ほど見たように、これは述語づけの基体として提示されているわけではないので——カテゴリーの区別はもちろん前提となっているが——、具体的なものとしての実体であると言うことができるだろう。

しかし木材という例を見て、ここで直接的に運動変化するものと言われているのは質料ではないかという反論もあるかもしれない。「質料」の概念の解釈にもよるが、アリストテレスにとって、「質料」は厳密には、いわゆる結合体（質料と形相からなる実体）の構成要素を指すものである。属性がそのうちにあるところの質料は、そのような構成要素としての質料ではなく、運動変化がそこにおいてあるところの一個のもの（個物）であると考えられる。実際、「質料」の用法には幅があり、運動変化がそこにおいてあるところの個物を表す用法も認められている⁽¹²⁾。したがって、木材という例が挙げられていても、ここで直接的に運動変化するものと言われているものを具体的な個物としての実体と考えることは可能である。

アリストテレスは『自然学』第5巻第1章の後半で、自体的な運動変化を念頭に置いて、運動変化における反対のものに注意を向けることによって、自体的な運動変化をカテゴリーに従って区別するとともに、実体それ自体の生成と消滅を運動変化から区別するというところを行っている。興味深いこととして、述語づけの基体や生成変化の原理としての基体を表すのに用いられる「ヒュポケイメノン」という語が、まったく異なる意味で用いられているということがある。属性的な変化について言えば、その運動変化が「それから」と「それへ」と言われる際の「それ」には属性的な形相の名が入る。例えば木材が冷たいものから熱いものになる場合がそうである。アリストテレスはここで、「熱い」のような「肯定的に示されるもの (*to kataphasei déloumenon*)」に、「ヒュポケイメノン」——「〈設定されているもの〉」と訳すことにする——という語を割り当てている (225a6-7)⁽¹³⁾。アリストテレスは、木材が冷たいものから熱いものになるような運動変化を一般的に表すにあたって、「〈設定されているもの〉から〔他の〕〈設定されているもの〉へ」という言い方をする (a3-4)。また、熱いものから熱くないものになるような、矛盾対立 (*antiphrasis*) による運動変化は、「〈設定されているもの〉から〈設定されているもの〉ではないもの (*mê hupokeimenon*) へ」という言い方で表され (a4-5)、逆の場合は、「〈設定されているもの〉ではないものから (*ouk ex hupokeimenou*)⁽¹⁴⁾ 〈設定されているもの〉へ」という言い方で表される (a5)。「ヒュポケイメノン」という、述語づけの理論と生成変化の説明において重要な役割を果たす概念がここで生成変化の基体という意味で用いられていないことは、この章でのアリストテレスの関心が生成変化の原理には向いていないことを暗に示している。ここでは反対のものが重要なのであり、反対のものに注意を向けることによって、自体的な運動変化が区別されている。

「ヒュポケイメノン」の用法の問題はともかくとして、具体的なものとしての実体という理解を支持するテキストがこの文脈にも見られる。それは、端的な生成および消滅と、属性的な変化とが区別される以下の一節である。

〈設定されているもの〉ではないものから〈設定されているもの〉への、矛盾対立による変化 (*hē ... metabolē kat' antiphasin*) は、生成 (*genesis*) であるが、一方、端的な仕方での変化は端的な生成であり (*hē men haplōs haplē*)、他方、[端的な仕方ではない] ある変化は[属性的な] 何かの生成である (*hē de tis tinos*) (例えば白いものではないものから白いものへの変化はそのもの[白いもの]の生成であるが、端的に〈あらぬ〉ものから実体[端的に〈ある〉もの]への変化は端的な仕方での生成であり (*hē d' ek tou mē ontos haplōs eis ousian genesis haplōs*)、これ[実体への変化]についてわれわれは、[属性的な] 何かになる (*ti gignesthai*) とは語らず、端的な仕方での生成する (*haplōs gignesthai*) と語る)。そして〈設定されているもの〉から〈設定されているもの〉ではないものへの変化は消滅であるが、生成の場合にも言われたように、一方、実体[端的に〈ある〉もの]から[端的に]「あらぬ」への変化は端的な仕方での消滅であり (*haplōs men hē ek tēs ousias eis to mē einai*)、他方、対立している否定への変化は[属性的な] 何かの消滅である (*tis de hē eis tēn antikeimenēn apophasin*)。(*Ph. V 1, 225a12-20*)

「なる」という動詞が用いられることから、属性的な変化も「生成」と呼ばれるが——『自然学』第1巻第7章においてもそうである——、実体が生成する場合の生成と区別して、ここでは「何かの生成」と言われている。この「何か」は、実体ではない、属性の名で呼ばれるものを指している⁽¹⁵⁾。上の引用によれば、「何かの生成」と区別される「端的な生成」も矛盾対立による変化とされている。そうすると、実体が生成する場合も、〈設定されているもの〉ではないものから〈設定されているもの〉へという形で説明されるはずである。Rossの解釈では、反対のものとしての「形相」には実体的な形相も含まれるが⁽¹⁶⁾、この解釈に基づくなら、例えば〈机〉という形相を〈設定されているもの〉の例として挙げることができるだろう。この場合、「〈設定されているもの〉ではないもの」とは「〈机〉ではないもの」であることになる。『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明を踏まえれば、〈机〉ではないものとは木材といった質料のことであると考えられる。しかしこの説明を持ち出すことには問題があるように思われる。まず、生成変化の基体というものへの注目が第5巻第1章には見られない。そしてより重要なことであるが、端的な生成に関するここでの説明によれば、「〈設定されているもの〉ではないもの」がこの場合、「端的に〈あらぬ〉もの」と言われている。「〈机〉ではないもの」は補語がついた表現であり、アリストテレスはそのようなものを「端的に〈あらぬ〉もの」とは呼ばないだろう。生成変化の

基体に注意が向けられている文脈であれば、〈机〉ではないものとして質料としての木材を生成の始点にあるものとして考えることができるだろうが、ここではそのような注意は見られず、むしろ「反対のもの」に注意が向けられることによって運動変化の種類が区別されている。端的に〈あらぬ〉ものから一個の机が生成するということによってアリストテレスが言いたいのは、〈机〉ではない質料から一個の机が生成するというのではなく、文字どおり、存在していなかった机が存在するようになるということであると考えられる。

このように考える場合でも、〈設定されているもの〉のほうは〈机〉という実体的な形相と理解することが可能であると思われるかもしれない。というのも、個別的な実体が生成する場合、生成がそれへと向かうところのものは〈机〉といった実体的な形相であるということもできるからである。属性的な変化の場合における〈設定されているもの〉が属性的な形相であることから考えても、実体的な生成の場合は実体的な形相がそれにあたると考えるのが自然であるように思われる。しかし、端的な生成については、その生成の始点が「端的に〈あらぬ〉もの」と言われていることから、この生成の終点は具体的な一個の机であると理解したほうがよいように思われる。属性的な変化の場合との類比よりも、端的な生成の説明における「〈設定されているもの〉ではないもの」と「〈設定されているもの〉」との関係のほうが重要であると考えられるので、端的な生成の説明における「〈設定されているもの〉」は、形相的なものではなく、具体的な一個のものとしての実体を指しているとして理解したほうがよいだろう。アリストテレスは、同一の種名辞が個別的な実体（結合体）を指すのにもその形相を指すのにも用いられることを認めているが（cf. *Met. Z* 10, 1035b1-3）、この曖昧さも手伝って、属性的な変化においては〈設定されているもの〉として形相が考えられ、端的な生成においては〈設定されているもの〉として実体的な形相ではなく具体的な実体が考えられるというずれが生じたのだと考えることもできるだろう。ともかく、存在していなかったものが存在するようになることが端的な生成であると考えられるので、端的な生成における終点は具体的なものとしての個別的な実体であると考えるのが自然であるだろう。

以上によって、述語づけの理論の観点において、個別的な実体が種、類、付帯的な属性から区別された裸の基体であるように見えるという問題に対して、その理論が提示されている当の著作である『カテゴリー論』における「実体」の特徴に関する論述、およびこれと関連する『自然学』第5巻第1章における運動変化に関する論述から、アリストテレスが考えている個別的な実体がそれ自身変化するものである具体的な実体であるということが明らかになった。アリストテレスの存在理解において運動変化の視点がいかに重要であるかがあらためて確認されたとと言えるだろう。

注

- (1) 伝統的な訳語は 'substance'、'Substanz'、「実体」などであり、現在でも多くの翻訳や研究論文などにおいて採用されている。しかし、「何であるか」という問いや、「ある」、「存在する」という意味合いとのつなが

- りを考えた訳語もある。『カテゴリー論』、『自然学』、『形而上学』の翻訳や研究書の一部を参照すると、‘Wesenheit’ (Hermann Bonitz, Eduard Wellmann (ed.), *Aristoteles, Metaphysik, Auf der Grundlage der Bearbeitungen von Héctor Carvallo und Ernesto Grassi, neu herausgegeben von Ursula Wolf*, Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag, 1994)、‘seiendes Wesen / Wesenheit’ (Hans Günter Zekl, *Aristoteles, Kategorien, Hermeneutik oder vom sprachlichen Ausdruck, Herausgegeben, übersetzt, mit Einleitungen und Anmerkungen versehen*, Hamburg: Felix Meiner Verlag, 1998)、‘substantial being’ (Myles Burnyeat, *A Map of Metaphysics Zeta*, Pittsburgh: Mathesis Publications, 2001)、「本質存在」(中畑正志訳『カテゴリー論』、「アリストテレス全集1」、岩波書店、2013年)、「本質存在／基本存在／實在」(内山勝利訳『自然学』、「アリストテレス全集4」、岩波書店、2017年)、「reality’ (William Charlton, *Aristotle, Physics Books I and II, Translated with Introduction, Commentary, Note on Recent Work, and Revised Bibliography*, Oxford: Clarendon Press, 1970, 1992)、「reality / real object’ (Julia Annas, *Aristotle’s Metaphysics Books M and N, Translated with Introduction and Notes*, Oxford: Clarendon Press, 1976)といった訳語が見られる。訳されずにそのまま‘ousia’、「ウーシアー」と表される場合も多い。なお、本稿で主に取り上げる『カテゴリー論』と『自然学』のテキストとしてはOCT版 (L. Minio-Paluello, *Aristotelis Categoriae et Liber De Interpretatione*, Oxford: Clarendon Press, 1949, W. D. Ross, *Aristotelis Physica*, Oxford: Clarendon Press, 1950) を用いる。
- (2) 「ウーシアー」が、カテゴリーの学説を前提することなく、その語のもともとの意味合いに即して「本質」という意味で用いられる場合もある (cf. *Cat.* 1, 1a2, 4, 7, 10)。なお、『自然学』や『形而上学』に目を向ければ、質料と形相からなる結合体における形相も——あるいはそれこそが——「ウーシアー」と呼ばれるが、この場合、カテゴリー学説と生成論が前提にされた上で実体的な形相と本質との同一性が念頭に置かれているので、その語のもともとの意味合いに即した「本質」よりも術語的な仕方では用いられていると考えられる。そこで筆者は以前から、実体的な形相としての「ウーシアー」を「〈実体〉」と訳している。
 - (3) 『カテゴリー論』第4章や『トポス論』第1巻第9章、『形而上学』Z巻第1章など、カテゴリーの列挙と説明が行われる箇所を参照。
 - (4) これについては、拙稿「アリストテレスにおけるウーシアーの優位性について」(『ギリシャ哲学セミナー論集』19、2023年、pp. 31-48) で論じた。
 - (5) 『カテゴリー論』第2章における、述語づけと内属性による〈ある〉ものの分類を参照。「基体のうちにある」という言い回しによって、基体としての実体とそのうちにある付帯的な属性との区別が理解され、「基体について言われる (述語づけられる)」という言い回しによって、同一カテゴリー内の類種構造が理解される。
 - (6) 「述語づけ」という語は、前注でも触れた『カテゴリー論』第2章における区別によるなら、同一カテゴリー内のものにのみ適用される。しかし、「ある特定の人間が健康である」といった内属性も、広義では「述語づけ」と言うことができる。本稿で「述語づけの理論」という場合、広義の「述語づけ」を意味するものとする。
 - (7) 古代の注釈者の一人であるデクシッポスは、アリストテレスの立派な行為と、エウリュバトスの劣悪な行為を例に挙げて、「アリストテレスの行為は、「立派で正しくある」ことが取り去られるなら、もはやアリストテレスの行為であるとは言われぬし、エウリュバトスの行為は、「悪くある」ことがもはやなければ、エウリュバトスの行為とは言われぬ」(『アリストテレス『カテゴリー論』注解 57. 1-3) と説明している (A. Busse, *Dexippi in Aristotelis Categoriae Commentarium*, in *Commentaria in Aristotelem Graeca*, vol. 4, pars 2, Berlin: Reimer, 1888)。
 - (8) デクシッポスは、実体が反対のものを受け入れることができるという特徴を理解するにあたって生成変化の基体という考えを持ち出し、「反対のものが変化しても実体は同じものであり続ける (*diamenousin*)」と説明している (『アリストテレス『カテゴリー論』注解 57. 7-8) と説明している。これは『自然学』第1巻第7章における生成変化の説明を前提にした理解である。しかし『カテゴリー論』第5章の当該の文脈では、変化するのは実体それ自体であり、反対のものではない。反対のものは実体を受け入れるものとして理解されている。ただ、デクシッポスは、数的に同一である実体の例としてソクラテスを挙げているので (56. 21)、

具体的な個物が変化することを念頭に置いていると考えられる。

- (9) ただし、アリストテレスはそこで、「個別的な」という語を用いていない。むしろ、生成するものを、「説明規定において」は二つ、すなわち、「教養のないもの」と「人間」という二つであると説明しており、分析的な仕方では「人間」が取り出されている (cf. *Ph.* I 7, 190a15-18)。しかし、属性的な変化をするのが個別的な人間であることは明らかであるので、個別的な人間が存続する基体とみなされていると理解できる。同じ章でアリストテレスは、属性的な変化の説明との類比で実体的な生成の存続基体として質料があることを明らかにするが、このことも存続基体が個別的なものであることを示していると考えられる。
- (10) 『自然学』第5巻第1章では、「変化」と「運動変化」が区別されずに用いられている。ただし、この章のおわりになると、端的な生成と消滅は運動変化ではないと言われることになる。この章では、「運動変化」が比較的多く用いられているので、本稿の以下の部分では「運動変化」という語を用いることにする。
- (11) Rossはこの箇所「形相」について、実体的な形相と属性的な形相の両方を含むという理解を提示し、また224b11の「形相」については、「様態」と「場所」が続けて示されていることから、実体的な形相と理解している (W. D. Ross, *Aristotle's Physics: A Revised Text with Introduction and Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 1936, p. 614)。たしかに、運動変化が「それへ」であるところの「それ」に実体的な形相を考えることは可能である。例えば〈机〉という形相の欠如した状態から〈机〉という形相に向かう運動変化——これは「端的な生成」と言われる実体的な生成である——を考えることができる。実際、225a12からの一節でそのことが説明されている。しかし、ここで問題にしている箇所を理解するのに、225a12からの一節の内容を前提してよいかどうかは検討の余地がある。この箇所の例を見る限り、アリストテレスは属性的な変化のことを考えて語っており、属性的な形相を念頭に置いていると考えるのが自然であるように思われる。
- (12) これについては、拙著『アリストテレスの存在論——〈実体〉とは何か』、早稲田大学出版部、2015年の第4章第2節 (pp. 95-104) を参照。
- (13) ここでの「ヒュポケイメノン」はいわゆる「基体」とは異なるという伝統的な解釈に従う (Ross (1936), pp. 616-617を参照)。新版全集の注 (内山勝利訳『自然学』、「アリストテレス全集4」、岩波書店、2017年、p. 255) も参照。新版全集では、用法が異なることを注意した上で、生成変化の基体を表すのと同じ「基底なもの」という訳が与えられている (否定の場合は「非基底なもの」と訳されている)。筆者は生成変化の原理としての基体との区別を明確にするために、「反対のもの」としての「ヒュポケイメノン」に対して、その語のありふれた用法 (「仮定されている」とか「前提されている」といった用法) とのつながりも見えるような訳語を与えた。なお、伝統的な訳し方に反論する解釈者もいる。Bowinは「基にある」という意味合いを残すために、ここでの「ヒュポケイメノン」を、肯定表現の基にある事態 (the state of affairs) と解した上で、『自然学』第5巻第1章後半のテキストについて考察を行っている (John Bowin, 'Aristotle's *Physics* 5.1, 225a1-b5', *Philosophical Inquiry* 43, 2019, pp. 147-164)。また、松浦和也氏はこの箇所の「ヒュポケイメノン」を主題として取り上げ、井上哲学における「先言措定」の着想を持ち出すことによって独自の解釈を提示している (松浦和也「生成消滅とヒュポケイメノン——アリストテレス『自然学』第5巻第1章における変化の分類——」、東洋大学文学部哲学研究室『白山哲学』56号、2022年、pp. 65-84)。
- (14) RossがBonitzのIndexにおける否定の'ou'の用例を参照して説明しているとおり、'ouk ex hupokeimenou' は'ek mē hupokeimenou'と同じことを意味している (Ross (1936), p. 617を参照)。
- (15) 『形而上学』Z巻第1章の一節においても、第一に〈ある〉ものとしての実体について、「何かであるものではなく端的にあるもの (ou ti on all' on haplōs)」と言われている (*Met.* Z 1, 1028a30-31)。
- (16) 注(11)を参照。

本研究はJSPS科研費22K00043の助成を受けたものである。